鶴見村大庄屋直江氏について

後藤武夫

一、所在地　大分県別府市大字鶴見北中四組

一、所有者　別府市大字鶴見北中町自治会並に公民館

鍵責任者　同町会計　内藤幸一氏

・直江氏は戦後熊本方面に転居したため自治会が管理するようになった。

① 一木造り　江戸時代初期の作

② 基礎三重からなる優美な座像

③ 右手に延命錫杖　左手に宝珠をもつ

④ 全体の表面は朱塗、光背は金箔塗

⑤ 総高（基礎・尊像・光背）七五㌢

⑥ 台座横幅三五㌢・基礎横幅一五㌢

⑦ 背部（裏側）に墨書銘あり

定詳速見内鶴見村高顕庵祀奉造立地蔵大菩薩尊者也　右之仏師者日洲入来而当郡中村　無残請仏作

延命地蔵大菩薩座像実測　（昭和一五年四月）

延命地蔵大菩薩座像と落武者直江氏の謎

戦時中のことである。陸軍中野学校を出て中支の南昌の戦線の荒野で情報任務についていた私に、突然内地に帰還の命令がでた。海軍艦船隊の出入港である別府で情報の収集が目的であった。それから私は、軍、民の二足の草鞋を履いて、毎日のように別府市内を走らず、ぶらりぶらりと歴史の研究と任務の遂行に専念していた。

その頃は中組（現火売町）、北中（現北中町）が一つの火売町であった。北中には朝日村だった時の村長直江忍さんの屋敷があり、ここにあ位置してある地蔵尊は直江氏が越後からもってきたという伝承があり、私も聞いていたので調査したものが手許にあるので書き留めておく。

立致直年其名行可行蔵父子也　然当時住寺北陸道
越後國従来高顕寺住其名須慶栄次代之岸林造立也
信心之趣意　武運長久息災延命殊子孫繁昌氏子
益々繁昌慶長十九年甲辰林鐘□日石鹿　墨書花押
欽奉華厳地蔵尊者須慶松翁道清弼智景林代ヨリ氏
仏也　歳貞享三丙寅暦八月寿日　花押
須慶五代孫直江彦左衛門尉景林敬白　同宝明我書

⑧　逗子は仏壇造扉付　地蔵堂を建立して奉祀する

この地蔵尊は直江家伝来のものである。墨銘による

と須慶松翁清了智景林の代から氏仏としたしある。

景林は、越後の国から豊後の国に従来した須慶栄次という僧「岸林」であり、その名は行蔵で妻は明という人であった。

この地蔵尊は、速見郡北中村（この辺りを中村といった）に来た日向の仏師に請て造立したもので、直江直年は、その頃ここにあった高顕庵の住師となったものである。

直江家の口碑伝承の、越後から従来したとき「胸に毘沙門天を抱き、背中に延命地蔵大菩薩を背負って来た」ということは、鶴見北中に永年居住している人だったら誰でもが知っていることである。墨書銘は、九十年後の貞享三丙寅年（一六八六）に、岸林五代の孫である直江彦左衛門尉景林が由来を書いたものである。

毘沙門天については、直江家が前述のように戦後熊本方面に転居したとき、熊本に持参したものと思われていた。しかし、最近、北中町の佐藤節雄氏が、「自家にある仏像は、昔から鶴見の庵にあったと伝えられている」これが、直江家の守り本尊の毘沙門天ではなかろうかと語られている。佐藤家は南鉄輪村の庄屋で、直江雄八郎の養子になった郁蔵重素の生家であるので、或るいは佐藤家に残されているのかもしれない。

直江氏の九州落ちについては、考察してみたい。

上杉謙信は越後の守護代長尾為景の次男として生まれた。長じて、甲州の雄武田信玄と「五ケ度合戦」におよび、その勝敗は決せずして倒れた。謙信は戦国武将としては、とくに変わり種で生涯独身で過ごした。したがって甥の景勝と小田原の北条氏康の子景虎（氏秀）の二人を養子にしていたが、謙信亡き後家督相続の争いが起った。「御館の乱」である。

謙信は、比叡山延暦寺で入道して宗心と号したが、臨終の折りに直江山城守実綱の手をとって景虎の家督相続を託したといわれる。景虎の妻が直江山城守の息女であったともいわれる。

直江山城守は景虎について戦ったが敗れた。実綱は、景虎を小田原にともなって落ちたが、途中、鮫ケ尾城に立ち寄り城主堀江宗親に裏切られて討ち死にした。しかし実は両人とも生き延びて、景虎・実綱共には豊臣秀吉の小田原攻めで討ち死にしたともいわれる。山城守の墓は越後にあるとされているが、影武者であろうといわれる。

小田原から九州落ちしたのが景年（景虎の子）と直年と改名し、豊後に落ちつき高顕庵（こうげんあん）に住したのである。口碑の「越後から」落ちてくるときではなく「小田原」であろう。

一毘沙門天は、祖父上杉謙信の入道宗心の守り本尊である。また謙信は毘沙門天の申し子でもあった。

一延命地蔵は、命を守るため落人たる者の信仰は当然のことである。「地蔵は、呪咀、及び毒薬の害を除き、延命を得さしめる」守り本尊である。また、「景」の字を許されて使用することは、景年以後も使用している。

一高顕庵の住師として鶴見村北中に住みついている。

一高顕庵は現代の稲荷社の在る所で、鶴見七庵の一つである。火男火売神社の神宮寺の支配を受けていた。謙信が越後にありしころ、入道宗心となった比叡山の末流、鶴見の高顕庵の住師となったのも何かの理由があったのではないだろうか。

時代は幕末の頃もすぎ去らんとするとき、森藩が生んだ学者直江雄八郎重枝は、この北中村の大庄屋とし

て景年の系統から出た、森藩の出世男である。

直江雄八郎重枝について

「鶴見村は、原中村と北中村を合わせた村で、東西一里十町、南北十九町。農家二七五戸、牛二五　頭、馬七頭を飼育している。米高九四三石（通常鶴見千石）、麦六八石、七島藺一、三三三束、生姜三石を産出する」これは、明治十年に西南の役に際して、官軍の使役取立のための調査である。（古殿文書・古殿の後藤近蔵は田原坂の戦に参加した）

鶴見村の大庄屋になった直江雄八郎は、森藩士伊藤郡太夫の次男として玖珠に生まれた。父の郡太夫が江戸に出奔したため、伯父瀬口喜蔵に養育された。雄八郎は藩士として教育を一通り受けて、寛政九年（一七九七）十六才のとき、鶴見村の大庄屋直江弥藤太景良の養子となって、鶴見村北中に来た。

国学を中津の渡邊重名や、伊勢の荒木田久老に学び、若くして優秀名國学者としての道を進み、森藩ではすでに認められていた。文化七・八年（一八一一）に幕府測量方の伊能忠敬が、豊前、豊後の測量のとき、とくに忠敬に所望されて天領ならびに森藩領の現地案内の説明役を勤めた。別府・浜脇・鶴見・石垣・鉄輪・平田・辻間・日出・豊岡・山香・立石の測量については、「九州測量日記」に詳しいのでここではぶく。

伊能忠敬に従者として測量に参加したありさまは、「文化八未年（一八一一）正月朔日　朝より晴天　町奉行増田茂太夫、郡奉行木戸庄左衛門、代官清田九郎左衛門、町惣年寄渡邊久左衛門、年頭礼に出る　此度久留島伊豫守領分庄屋鶴見村直江雄八郎、辻間村庄屋松川寛平年首に来る　久留島侯より贈物あり　我等江半切紙五千枚、坂部江同三千枚　下川辺、青木、永井千五百枚宛　内弟子三人　侍二人江同千枚　棹取二人江同八百枚宛　小者五人江同六百枚宛被送下　即受納　以下略」。以上十七名の測量隊に警護の役を勤める侍二人は、直江雄八郎の案内で鶴見村の地図を作成した。

後、江戸に帰った忠敬が「豊後の国の湯の湧く里に学者直江雄八郎あり」と推奨したことで、久留島伊豫守の

知るところとなった。また、文化八・九年は豊前豊後の諸藩に百姓一揆が起こり、大庄屋や郡奉行、代官、富豪の居宅が襲われ、家屋や墓石が壊されたが、鶴見村は、雄八郎の農政指導が徹底していたので、被害は僅少であったという。

文化一四年（一八一七）春には、造営奉行となり荘厳な火男火売神社の再興に尽力した。また、天保元年（一八三）より藩主久留島通嘉侯の命を受けて、小倉照湯の湯主佐藤忠右衛門と共に照湯の湯場を広げ、天保一四年に藩侯の「お茶屋」を造営した（佐藤忠右衛門「豊後國速見郡鶴見村照湯山温泉場案内」）。照湯については、雄八郎重枝が文を書き、藩のお抱え絵師江川吉貞が挿し絵を書いた「鶴見七湯の記」に、その繁栄ぶりが描かれている。

雄八郎は、功顕を藩侯に認められ伊島姓を賜わった。また、天保九年（一八三八）に森藩物産方会所奉行に栄進し、大坂蔵屋敷留守役となった。同一二年正月に中小姓となったので、先に述べたように、南鉄輪庄屋佐藤郁蔵を養子に迎え、北中の村政を委ねた。

伊島雄八郎は、弘化二年（一八四五）に寺社奉行になり、嘉永六年正月一六日に七六才で逝去した。久留島藩は小藩とはいえ、庄屋から寺社奉行にまで栄達した雄八郎の学識と知謀は、後世まで語りつがれた。

鶴見村二題

立小野村にあった「たつおの湯」と薬師地蔵

幻といわれた立小野村は、弘安八年（一二八五）に書かれた豊後國図田帳に、

「速見郡千町餘五町　石垣荘二百町、本荘百四十町宇佐領々主神宮寺名主等、別府六十町　地頭職名名越備前左近大夫殿、朝見郷八十町宇佐領　地頭職士肥二王丸、竈門荘八十町　宇佐弥勒寺領一本作百余町、小坂十七町　大将家法華堂別当僧都房　平湯・立小野村十町鶴見村加納本大友兵庫入道」とある。

この図田帳にある「平湯」は今の海地獄である。海地獄と明記されるのは文化文政以降である。もともと鉄輪の里人は、平湯のことをヒラテー湯と呼び、その西側にあ

る温泉（坊主新地獄付近）を鬼石のタツオノン湯と呼んでいた。もちろんヒラテーは方言で、タツオノは、漢字になおせば立小野である。

豊後図田帳に書かれた立小野は、現代の農地台帳では山田、奥の山田、ハイノ木渡りの用水のあて口までと、明磐原と湯山の一部（地獄くぼ）までゞをいった。これから推し量るとこの村は、縦に長くのびた村で、東西は火売町の中道（塚原線）火売北中村に通ずる辺りで、現在の県立農研、稲荷山付近と白池地獄付近で、昔の明磐街道が鉄輪との境であった。白池地獄横に我が家の田があった頃、亡父が「タツオノに仕事にゆく」よくいっていた。明治・大正生まれの人しか覚えていない地名となった。

薬師地蔵は、鶴見火売町六組の山本信行氏の所有地に鎮座している。

石殿（九三、一㌢）は安山岩で造られ、その中に地蔵尊が安置されている。地蔵尊の台座には、発起人・世話人宮大夫、彦三郎、影乃木加兵衛、施主中野屋敷組中・大宮司組中と刻まれている。火売町六組に影乃木の地名がある。鎌倉時代、鶴見権現に楠木の巨木があり、その影が影乃木までのびたので、ここの地名を影乃木といった。地蔵尊はもとタツオノ湯に安置され、この湯に入っていた者が座前となって、地蔵の供養と春秋二度の「おせったい」していた。現在は、山本信行、郷司幸夫、後藤則男、後藤勲、松川利夫氏などが引き続きお守りをしている。

円通寺庵のコンピラ祠

ルミエールの丘の東側、実相寺と角殿山の間を南北に走る道路がある。ここを犬の馬場といった。慶長五年の石垣原合戦のとき、黒田軍の第一陣の将母里与三兵衛、母里太兵衛、時枝平太夫の陣地があったところである。

ここに円通庵があった。ただ雨露を凌ぐだけの庵であったであろう。ついさき頃までは、大岩のうえに祀られた金毘羅祠付近は、昼なお暗い森のなかであった。

昔、実相寺山の東側の麓に宝泉山実相寺があった。この実相寺は、合戦の戦火にかかり灰燼に帰したのち、知行主となった久留島侯の助力で、寺領五十石を給されて再興された。宝泉山円通庵は、もとの実相寺とは反対側の実相寺山の西側の麓にあった。

大石の上に祀ってあった金毘羅石祠は、なぜか扉を閉じて開帳しなかった。

コンピラは、印度語で鰐の意味である。五百年前にポルトガル人が印度のゴアを占領して、貿易船をカンタン湾に派遣したとき、航海の安全を祈願する神として、鶴見村にも奉祀されたものといわれる。以後円通庵は豊漁の神として繁盛したともいう。

しかし、このご神体の巨岩は、頭部に十字が刻まれたキリシタンのゼウスであり、鶴見ゑび原にあるエビス神社のご神体とほぼ同型の顔だちが浮かんで見える。天正九年春、大友宗麟に招かれた宣教師一行が、航海の安全を祈ってコンピラに詣でたことが耶蘇教日本年表にあるが、円通庵などは、或るいはコンピラを隠れ蓑にして、じつは、ゼウスの像を安置したのかもしれない。

この円通庵の金毘羅教徒は、鶴見村原中村の人によらず、明磐、小倉、竹ノ内などに多くの信者があったと伝えられる。

この庵の守をしていた馬場町の平松忠次、平松源六の両氏に戦前戦後数回にわたり調査のため協力していただいた。

なお、この稿を書くにあたり、大野保治先生、川辺正二、山本信行、安部米吉、内藤幸一の諸氏に多大のお世話をおかけしたことについて、厚くお礼を申します。